

8月31日（続き） 報告：熊谷明史

午前11時50分頃ロビボ村入り口分岐点に到着。約1時間のドライブであった。心の中で旅の神様に感謝。ここからロビボ村までは車はいれないので歩き。荷物を下ろし、一休み。



分岐部に到着

午後12時半。分岐点出発。

並んでは歩けない狭い山道であったが道の状態は乾いておりほとんどが下りだったため荷物をしょっていてもそんなに疲れはしなかった。ただただ汗だくではあった。



ロビボ村への最後のアプローチは歩きだ。てくてくと坂道を下る。健脚の荒井さんは重いスタッフバッグを持っても平気で歩いて行く。



ロビボ村の典型的な農家の家

午後1時。

約30分で目的地、ロビボ村でお世話になる生産農家に到着。

ロビボ村にはコカマウに加盟している農家が13世帯あるとのことだが我々がお世話になる農家はリーダーの農家だと思う。約3棟の母屋と1棟の倉庫のある家。一休みした後、やや大きい小屋で住人たちが歓迎会をしてくれた。数人の長老とおぼしきおじいさんたちと中年で組合のリーダーでもあるご主人、数名のおばあちゃんたちと元気のいい子供たちが参加。

彼らの歓迎の仕方は、まず、客人から一人一人名前をいって次に一家の人々が名前を言って挨拶となる。おもむろにコーヒーが配られコーヒーをすすりながらゆったりたばこをくゆらす。

このコーヒーはちょっと生ぬるくしかも砂糖たっぷりであまいものであった。おかわり自由。客人である我々にはいすが用意されたが村民たちは立ったままだ。約20名の大人数の我々を受け入れるため普段自分たちの使っている部屋を提供してくれた彼らに心から感謝したい。お互いにコーヒーを飲みながらたばこをすうことがまずは歓迎の基本と思われるが、こちらにも喫煙者はいるのだがさすがに誰もたばこを吸うものはいなかったと思う。

「ほっかいどうピーストレード」を代表して荒井さんから村民の皆さんにおみやげのサッカーボールとバレーボールが手渡された。子供たちがとても喜んですぐにボールで遊び始めた。

それから、栗栖さんが通訳になってコカマウのリーダーへの質問会が始まった。積極的で勉強熱心な学生諸君からたくさんの質問があつてその一つ一つに丁寧に答えるリーダーの真摯で知的な態度は印象的であった。こちらがいすにかけているのにリーダーは長時間立ちっぱなしで答えてくれ、最後はやつといすに座ってくれた。質疑応答はきわめて多様で、興味深いものであったがその内容の紹介は学生さんたちのレポートに譲りここでは割愛させてもらう。



到着



子供たちとボール遊びをするメンバー。



歓迎の言葉を述べる長老。
栗栖さんが通訳してくれた。



ほっかいどうピーストレードから
お土産がリーダーに贈られた。

午後3時頃。

1時間を悠に超えた質疑応答の後は女性たちが作ってくれたもてなしの昼食タイム。懐かしの××チキンラーメン風の麺を長粒米のご飯にかけて食べるのがこれがうまかった。おかずの炒め野菜の煮込みもくどくなくおいしかった。おかわりおかわりであった。

一休みした後、眠る場所の確認。竹の皮を引いた棚のようなベッドが男性組の寝場所であった。棚は長さが約2メートル半ぐらいでそこに5人が枕を並べ眠ることになる。それぞれが寝袋の準備をした。狭いのは仕方がない。背の低い僕でも足がはみ出してしまうので他のみんなは相当はみ出してしまう。床は土間の地面で日陰なためか冷たく寝心地は悪そうだ。古い山小屋での宿泊を想像してもらえばやや近いか。いすを並べてベッドにしていた八木田さんが言っていたが土間に直接寝るとかなり寒いとのことであった。事前に心配していた蚊



ロビボの台所

やダニの被害には遭わなかった。有理や荒井さんが寝泊まりした小屋は寒くはなかったものの多量のゴキブリと夜中中走り回るネズミがいたとのこと。

若く元気な森君、斉藤君が村の子供たちと一緒にサッカーボールやバレーボールで遊んでいた。10歳前後の子供たちはサッカーが上手だ。やっぱりサッカーはワールドスポーツ、ボールを蹴って遊ぶだけで言葉は通じなくてもすぐに友達になれる。我々が滞在したときはたまたま学校が休みだったらしく子供たちはずっと遊び回っていた。

「ほっかいどうピーストレード」グループは荒井さんが歌をみんなで歌おうと歌い出した。とても上手に歌うので彼女の周りにはすぐに子供たちが集まってきて一緒に歌い始めた。東ティモールの「Masi Olarinda」、日本の「上を向いて歩こう」、アンコール用として「もみじ」を練習した。村の子供たちの中にはギターをととても上手に弾く子たちがいる。1本弦がきれていてもなんのその、小さなギタリストたちだ。音楽やサッカーが本当に世界の共通語になるんだということを実感できた旅でもあった。次くるときまで何か楽器をものにしてこようと思うのであった。

夕方はみんなで夕食の準備をした。村の夕暮れは早く日がかげるとつれ急速に涼しくなってきた。はじめ電気がついてなかったので持参したヘッドランプ式の懐中電灯は役に立った。そのうち、自家発電機が回り始め村の広場の裸電球に電気がついた。

夕食はおかずが豊富でなかなかおいしかった。特にチリをつけて食べるととても辛いが食欲はもりもりだ。

我々が食べた後に村の人たちが食事を始める。昔の我が家もそうであったが礼儀作法はどこでも一緒か。

広場にビニールシートがひかれ映画上映会の準備が始まる。日はとっぴりくれ肌寒い中子供たちが毛布を頭から羽織りシートの上に座る。パソコンやモニターの電源のセッティングに時間がかかるが PARCIC のネルソン君が冷静沈着に線をつないで終了。ドライバーもなくねじ回しは包丁の刃を使い、指先でコードの皮をむき、確実に接続していく流れは同じような状況で何度も経験済みなのであろうか。その冷静な作業の進め方に感心してしまった。上映作品は「バリボー」というオーストラリアの作品だ。75年の独立宣言直後にインドネシア軍と独立反対派の民兵たちによって殺された5人のオーストラリアのジャーナリストの実話に近いストーリーだそうだ。音声はテトゥン語に吹き替えられている上に発電機の音のため僕らはただ映像を見るだけであつたが村人たちは音の出るスピーカーの周りに集まりたったまま熱心に最後まで観ていた。なかなかの力作で画を見ているだけでも何となく筋が分かりジャーナリストたちが捕まり殺されていくシーンは目に焼き付いた。

映画会は11時過ぎに始まり深夜の1時に終了というまさに深夜興業であつた。漆黒の夜の寒さはひとしおで十分防寒対策をしたつもりだったが体の芯まで冷え切ってしまった。

激安で購入してきた夏用の薄い寝袋の中で明日もこんなに寒かったらどうしようと思ひながらうつらうつらと長い一日が終わった。

photo@Yuuri Kumagai